

鈴木 寛 (兵庫教育大学教授)

ドはド? (その2)

音名と階名の混同が日本の音楽教育の間違いの原点にあります。確かにフランスやイタリアのように Do Re Mi の唱法しかなく、しかもそれが固定ド唱法として使われているわけでもなく、八調読み(又の名を白鍵読み)として使われていることが多いと言う点では日本とよく似ています。フランスの楽譜ではベートーベン作曲「交響曲第5番ド短調」という表現になっているのですが、日本(原則移動ド)では絶対に「ド短調」とは言わずに「八短調」と言います。



この場合フランス唱法も日本語も完全に対応します。しかし、次の場合は対応しません。



上の場合 Do がドになりますが、下の場合 Re がドになります。フランス語のアンダーラインの部分 (Fi と Di は

ファ#とド#)を表しています。

さて、下の図を見て欲しいのですが、本稿のタイトルが示す「ドはド?」は一番下の四つの唱法のそれぞれの「ド」のことなのです。

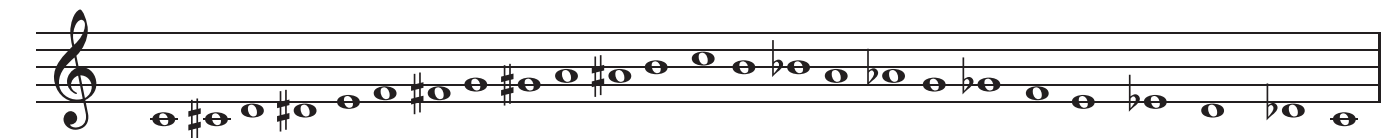
まずは固定ドですが、この「ド」はドイツ音名の「C」]と同じ意味です。以下の「八調読み」「白鍵読み」も同じですが、最後の「移動ド唱法」だけは意味が違います。

八長調の場合だけ音名の「ド」と階名の「ド」は一致しますが、世の中八調ばかりとは限りません。ト調やヘ調のような場合には音名唱の「ド」と移動ド唱法「ド」は同じになりません。ですから「ドはド?」なのです。

アルファベット唱法ではLとRの区別ができることが前提になっています。カタカナの「ラリルレロ」は「Ra Ri Ru Re Ro」なのか「La Li Lu Le Lo」なのかわかりません。ソのシャープを「ソ・シャープ」と発音できるほどゆっくりとした曲はこの頃見あたりません。ええい面倒だとばかりに見える記号を無視したのが「八調読み」と「白鍵読み」なのです。

#やb等がついた派生音さえ1シラブルで読めたらこのような「八調読み」や「白鍵読み」のような「不精読み」は生まれなかったでしょうし、L Rの区別ができればもっと日本的な唱法も生まれたことでしょう。

アンダーラインの音の呼び方で# bの区別ができたなら問題はそれほどこじれなかったようですが、実はもっと大変な別の問題があったのです。(続く)



ドイツ音名	C	Cis	D	Dis	E	F	Fis	G	Gis	A	Ais	H	C	H	B	A	As	G	Ges	F	E	Es	D	Des	C
英語 音名	C	C#	D	D#	E	F	F#	G	G#	A	A#	B	C	B	Bb	A	Ab	G	Gb	F	E	Eb	D	Db	C
日本語音名	ハ	嬰ハ	ニ	嬰ニ	ホ	ヘ	嬰ヘ	ト	嬰ト	イ	嬰イ	ロ	ハ	口	変口	イ	変イ	ト	変ト	ヘ	ホ	変ホ	ニ	変ニ	ハ
アイツ音名	Bi	Ro	To	Mu	Gu	Su	Pa	la	de	fe	ki	ni	bi	ni	ke	fe	da	la	Pu	Su	Gu	Mo	To	Ri	Bi
トニックソルファ	Doh	De	Ray	Re	Me	Fah	Fe	Soh	Se	La	Le	Te	Doh	Te	Ta	Lah	La	Soh	Sa	Fa	Me	Ma	Ray	Ra	Doh
ヤーレ唱法	ja	je	le	lu	li	ni	no	ro	ru	su	sa	wa	ja	wa	wu	su	so	ro	ri	ni	mi	me	le	la	ja
ドレミ唱法	Do	Di	Re	Ri	Mi	Fa	Fi	So	Si	La	Li	Ti	Do	Ti	Ta	La	Lu	So	Su	Fa	Mi	Mu	Re	Ru	Do
固定ド唱法	ド	ド#	レ	レ#	ミ	ファ	ファ#	ソ	ソ#	ラ	ラ#	シ	ド	シ	シb	ラ	ラb	ソ	ソb	ファ	ミ	ミb	レ	レb	ド
八調読み	ド	ド	レ	レ	ミ	ファ	ファ	ソ	ソ	ラ	ラ	シ	ド	シ	シ	ラ	ラ	ソ	ソ	ファ	ミ	ミ	レ	レ	ド
白鍵読み	ド	ド	レ	レ	ミ	ファ	ファ	ソ	ソ	ラ	ラ	シ	ド	シ	シ	ラ	ラ	ソ	ソ	ファ	ミ	ミ	レ	レ	ド
移動ド唱法	ド	ド	レ	レ	ミ	ファ	ファ	ソ	ソ	ラ	ラ	シ	ド	シ	シ	ラ	ラ	ソ	ソ	ファ	ミ	ミ	レ	レ	ド